

第1章 実践研究

発達が気になる子どもの保護者支援としての 短縮版ペアレント・トレーニングの効果

富澤 弥生¹⁾²⁾

本研究では、発達ที่気になる子どもの保護者支援として、オンラインによる個別支援方式および対面でのグループ支援方式で実施している全4回の短縮版ペアレント・トレーニングの効果を明らかにすることを目的とした。

効果として、子どもの症状の改善・行動・態度・表情・コミュニケーションに関する肯定的な変化がみられた。母親の変化としては、気持ちが楽になる・穏やかになる・子どもの気持ちを考える・これまでの自身の言動への気づきを得る・子どもがかわいいと思えたなどが明らかになった。さらに、きょうだいとの関係改善、父親の理解や協力体制ができたこと、家族の雰囲気良くなり笑顔が増えた効果がみられるなど家族への影響がみられた。また、さらなる支援につながる効果もみられ、短縮版PTでも効果が十分に得られ、支援者の人的資源に限られる中、多くの保護者支援利用につながる可能性が示唆された。課題として、定期的な情報発信やフィードバック、対面での対応、希望に沿える複数の支援方法の提供などがあげられ、全4回の短縮版は今後も継続し、対面とオンラインとのハイブリッドグループ方式PTなど提案し、さらに改善していきたいと考える。

キーワード：保護者支援、短縮版、ペアレント・トレーニング、発達

1. はじめに

本研究室では、2006年から発達ที่気になる子どもの保護者支援の一つとしてペアレント・トレーニングを定期的で開催している。ペアレント・トレーニングは、『AD/HDのペアレント・トレーニング—むずかしい子にやさしい子育て—』（シンシア・ウィットナム, 2002）をはじめとして、『こうすればうまくいく発達障害のペアレント・トレーニング実践マニュアル』（上林・北・河内・藤井, 2009）、『マンガでわかる 魔法のほめ方PT：叱らずに子どもを変える最強メソッド』（横山, 2014）など多くの本で紹介されている。

ペアレント・トレーニング（以下、PTとする）について、家村ら（2016）は、「親が行

1) 東北福祉大学健康科学部保健看護学科

2) 東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究室

動療法を学びその手法を用いることで、家庭において児の行動変容を促すことを目的とした親訓練プログラムである。PTは、ADHD児の親向けに開発されたプログラムとして普及してきたが、ADHD児のみならず、行動に問題のある子どもに広く適応される治療法である」と述べている。本研究室のPTの目的として、保護者が子どもに効果的な対処法を具体的に学ぶことにより、親子のコミュニケーションをよりスムーズにし、より良い親子関係を築くこと、さらに、発達障害の親子関係で起こりがちな問題である親子それぞれの自己評価の低下を防ぐことがあげられる。小野（2022）は、ADHDの心理社会的治療は薬物療法と並び重要とされ、心理社会的治療の一つとしてPTについて述べている。また、清野（2017）は、発達障害児の支援方法としてPTを家族に紹介することをすすめており、重要な支援として注目されている。

中田（2010）は、PTの課題として、参加希望者が多く、実施期間が隔週10回で5カ月と長いために待機者が累積する点などを挙げ、それを解消するために短縮版のプログラムの必要性について述べている。本研究室におけるPTは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、対面でのグループ支援方式では開催できない状況となった。そこで、2020年4月から、ICTを活用したオンラインによる同時双方向型の個別支援方式に切り替えて開催することにした。オンライン個別支援方式PTでは、個別性に合わせた対応ができること、利用のしやすさや、より多くの方の利用を図ること、体調不良による中断の可能性も考慮し、上手なほめ方を中心にとくに重要な対処法のみとした全4回の短縮版とした。さらに、2022年6月から、オンラインによる個別支援方式PTと並行して、対面でのグループ支援方式PTを再開し、同じ全4回の短縮版PTとした。短縮版PTについては、西村ら（2022）が全5回という短期間で終了する参加しやすいPTの可能性について報告している。本研究室の短縮版は全4回であり、それよりもさらに短縮した内容となっており、支援者の人的資源が限られる中での支援のあり方として、短縮版での効果について検討することは重要であると考えられる。

本研究では、発達に気になる子どもの保護者支援として、コロナ禍において本研究室で実施している全4回の短縮版PTの実績を含めた実際を紹介したうえで、その効果について検討し、示唆を得たので報告する。

2. 研究目的

発達に気になる子どもの保護者支援として実施している全4回の短縮版ペアレント・トレーニングの効果を明らかにすることを目的とした。

3. 研究方法

1) **対象**：全4回の短縮版PTをすべて終了し、終了後に研究に同意が得られた利用者、さらに条件を統一するため母親のみの利用を対象とした。

2) **期間**：2020年4月-2023年1月

3) **研究方法**：データ収集は、オンラインによる個別支援方式および対面でのグループ支援方式で実施している全4回の短縮版PT終了後に、口頭で述べた感想および郵送法によるアンケートへの回答内容から逐語録を作成した。そのデータを意味内容の類似性により質的帰納的に分析した。

4) 本研究室におけるPTの概要

(1) 本研究室におけるオンラインによる個別支援方式PTの実際

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、対面でのグループ支援が開催できない状況となり、2020年4月からICTを活用したオンラインによる同時双方向型の個別支援方式PTを開始し、2023年1月末現在の2年10か月間で計204回、計61名（うち、利用が母親のみ40、両親9、母親と祖母1、父親のみ1）の利用があった。

本研究におけるオンラインによる個別支援方式PTの方法は、Skypeのビデオ通話を使用し、同時双方向型で顔をみながら話ができる方法である。時間は1回40～60分、週1回程度の全4回とした。全4回の内容は、「第1回：オリエンテーション、子どもの行動を分類しましょう、ほめる基本を身につけよう」、「第2回：上手なほめ方を身につけよう、上手に指示してみましょう、スペシャルタイムを持ちましょう」、「第3回：ごほうびの与え方について学びましょう、家族会議を開いてみましょう」、「第4回：よくない行動を減らす方法を学びましょう、許しがたい行動に制限を加えましょう、まとめ」である。このうち、第3回の「ごほうびの与え方」は、よりよい行動のためのチャート（BBC）についての内容であり、完璧主義のお子さんには向かないため、説明のみで個別のアドバイス等が不要な場合は、計3回で終了することもあった。

また、PT終了後に相談したいことがあれば、メールでの返信、および追加のオンライン個別相談も行った。なお、体調不良などの理由での中断は計4名いたが、1回のみはおらず、全員2回以上利用し、「上手なほめ方」について学ぶことができた。日程について、第1回はメールのやりとりで調整し、第2回からはビデオ通話の際に相談した。資料配布は、メールの添付ファイル、または、印刷環境が整っていないなど希望により郵送とした。広報は大学HPで行い、申し込みは電話やメール、対象となる子どもの年齢・IQ・診断の有無などの制限は設けず、完全予約制、料金については、すべてこれまでのグループ支援方式と同じとした。さらに、新型コロナウイルス感染症拡大により仕事に影響のあった方には料金免除の対応も行い、計7家族が対象となった。

(2) 本研究室における対面でのグループ支援方式PTの実際

本研究室では、2006年から5～8名程度の固定した対面でのグループ支援方式、週1回のペースで全10回、約3か月かけてPTを年に2～3クール程度定期的に開催してきた。2016年12月から、参加のしやすさを考慮し、筆者が経験を重ね効率よく説明やアドバイスができるようになったこともあり、週1回のペースで全6回、約2カ月のPTに変更した。2006年～2020年まで計28クール開催していた。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年2月から対面でのグループ支援が開催できない状況となった。再開したのは2022年6月からであり、2023年1月現在で計2クール開催し、計7名（うち、利用が母親のみ5、両親1）の利用があった。再開はできたが、まだコロナ禍であるため、人数を4名までに制限し、常時マスク着用、体調確認、等の感染予防対策を行っている。さらに、利用のしやすさや、体調不良による中断の可能性も考慮し、上手なほめ方を中心にとくに重要な対処法のみとした上記と同様の全4回の短縮版PTとした。

表1 従来の全10回および全6回PTと短縮版PTの内容の比較

回数	全10回PT (約3か月)	全6回PT (約2か月)	全4回短縮版PT (約1か月)
内容	第1回：オリエンテーション 第2回：子どもの行動を分類しましょう 第3回：ほめ方の基本とポイント 第4回：ほめるタイミングをつかもう 第5回：上手なほめ方を身につけよう 第6回：ほめることを習慣にしよう 第7回：してほしくない行動を減らそう 第8回：ごほうびの与え方 第9回：許しがたい行動の制限のしかた 第10回：全体のまとめ	第1回：オリエンテーション、子どもの行動を分類しましょう 第2回：ほめる基本を身につけよう 第3回：上手なほめ方を身につけよう、上手に指示してみましょう、スペシャルタイムを持ちましょう 第4回：ごほうびの与え方について学びましょう、家族会議を開いてみましょう 第5回：よくない行動を減らす方法を学びましょう 第6回：許しがたい行動に制限を加えましょう、まとめ	第1回：オリエンテーション、子どもの行動を分類しましょう、ほめる基本を身につけよう 第2回：上手なほめ方を身につけよう、上手に指示してみましょう、スペシャルタイムを持ちましょう 第3回：ごほうびの与え方について学びましょう、家族会議を開いてみましょう 第4回：よくない行動を減らす方法を学びましょう、許しがたい行動に制限を加えましょう、まとめ

(3) 本研究室におけるPTのおもな内容

「子どもの行動を分類しましょう」は、子どもの行動をよくみて、「してほしい・ふやしたい良い行動」「してほしくない・減らしたい良くない行動」「許し難い危険な行動」の3種類に分けるもので、宿題は自宅に帰ってから、「良い行動」を中心に1日5つ、計3日分記録することである。

「上手なほめ方を身につけよう」は、「ほめる」(肯定的な注目をあたえる)ことで、親がしてほしいと思う子どもの行動がふえることを説明したうえで、ほめる基本である「すぐその場で、視線を合わせ笑顔で、行動を短い言葉で簡単に」について、ロールプレイで実際に練習している。本研究室では、発達が気になる子どもの特徴に合わせた効果的な方法として、「名前を呼びながら肩にポンポンとふれた後、手を肩に置いたまま、目線を子どもの目の高さよりも2cm下くらいでしっかり2秒合わせてから、できた行動をそのまま表現(例:「7時に着替え終わったね」)し、声のトーンや距離感や笑顔の作り方などを含め、対面でもオンライン方式でも同様の内容で、より具体的に指導している。

「スペシャルタイムを持ちましょう」は、週1回15分、子どもと母親がふたりだけで子どものしたいことを一緒に楽しむ時間である。その時間内は、指示や命令、否定的・批判的コメント、教育的な指導などはしないよう注意している。

また、PTのなかで「25%のルール」も紹介している。これは、親が目標としていることを100%と仮定し、子どもがその25%程度できたらもうOKと思ひましょう、その方が怒ることが減り、優しい声がけになり、子どものやる気を促し、結果的に親子ともいい方向にすすみやすい、という内容である。

5) 倫理的配慮

オンラインによる個別支援方式PT利用の方には、説明は郵送による書面で行い、同意書に署名し、アンケートの回答とともに返送のあった方を対象とした。また、対面でのグループ支援方式PTの方は口頭で直接説明し、同意を得た。さらに、プライバシー保護として個人が特定されないよう十分に配慮した。なお、本演題発表に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

4. 結果

本研究室において、オンラインによる個別支援方式および対面でのグループ支援方式で実施している全4回の短縮版PT利用者が終了後に、口頭で述べた感想およびアンケートへの回答内容について、意味内容の類似性により、1) 子どもの変化、2) 母親の変化、3) 家族の変化、4) 支援者への影響、5) 意見・要望、の5つに分類したデータ例を以下に示す。

1) 子どもの変化

- ・癩癩が減った。
- ・落ち着きがない子どもが受講2回目後から本当に驚くほどぐっと落ち着いて過ごすようになった。魔法でもかけられたかのようなだった。
- ・お利口になった。
- ・お手伝いを率先してするようになった。

- ・褒められたとは積極的に良いことをするようになった。
- ・褒めると頑張るようになった。
- ・目に見えて、褒められると嬉しそうな顔をし、自信を持って行動するようになった。
- ・言動が前向きになった。
- ・子どもから「お母さんは寄り添ってくれていない」などと言われることがあったが、ほめるようになったら言わなくなり、素直になった。
- ・私が咳をすると「大丈夫？」と思いやりの言葉がみられるようになった。
- ・表情が明るくなった。
- ・たくさん褒めた事でニコニコしていることが多くなった。
- ・子どもがとてもうれしそうにニコニコして、「久しぶりに三人で出かけるね。妹が生まれる前に出かけていたことがとても懐かしいんだ」と話し、自分の内面を言葉で表すようになった。褒められることで自分のことを話してもいいかなと思えるようになったのかもしれない。

2) 母親の変化

- ・イライラしなくなった。
- ・眉間にしわを寄せて怒らなくなりました。
- ・感情的に怒鳴ったり、イライラしたり、怒り散らすことが少なくなった。
- ・注意する際も冷静に、を心がけて、無駄にエネルギーを使いすぎることが減った。
- ・気持ちが楽になりました。
- ・自分の気持ちが穏やかになった。
- ・子どもが変わったというより、自身がそんなに目くじらを立てることなかったな、元気にご飯を食べて学校に行っている、それで十分だと思えた。
- ・気持ちが楽になり、穏やかに子どもに接することができるようになってきた。
- ・子どもが辛い中、いろいろ感じていたと気づくことができた。
- ・子どもが今何を思っているのか考えるようになりました。
- ・子どもに声がけするときに、この言葉で良いのかと考えられるようになった。
- ・褒め方や注意の仕方がわからなかったが、具体的に教えていただき、褒めることへのハードルが下がった。
- ・子どもに対して、以前より前向きな声がけができるようになった。
- ・スペシャルタイムをすることで、子どもと一緒に短時間でも密な時間を過ごすことができるようになった。
- ・25%のルールが衝撃的で、自分が子どもに対して高い要求をしていたのだと気づきました。
- ・子どもに過大な要求をしていたなと思った。

- ・子どもをほめようと気をつけているつもりだったが、これまできちんとほめられていなかったと思った。
- ・これまで余計なことも言ってしまっていたことに気がついた。
- ・家での関わり方が一番大事だと言うことを改めて理解することができた。
- ・親がどう接するかが子どもに最も影響を与えているという意識付けがしかりできたと思う。
- ・子どもがADHDなのか、何か問題あるのかなどあれこれ心配していたが、そうだとすもそうでなくても、私たちが変われば、子どもたちも毎日楽しく過ごせるんだなあと、一日一日を大切に過ごそうと思えるようになり、余計な心配をしなくなった。
- ・毎日毎日一日に何度も何度も怒鳴る日々が何年も続き、お互いに辛い日々で、本を50冊以上買って何か小さな事でも効果が得たいと思っても見つからず、先が見えない状態だった。PT中から子どもの大きな変化を感じ、効果を実感でき、感謝の気持ちでいっぱいです。
- ・親に対する気持ちにも寄り添って対応していただき、子どもが久しぶりにかわいいと思えた。

3) 家族の変化

- ・きょうだいの関係が良くなり、一緒に遊ぶ姿も見られるようになったことが最も印象的です。
- ・対象ではなかった方の子どもが親に心を開いてくれるようになった。
- ・主人（父親）は私（母親）の満足のためだけに受講しているようなことを言い、最初は理解してもらえませんでした。子どもの変化を感じ、主人も子どもにどのように接したらいいかわからずにいたこと、子どもが感情をコントロールできずかわいそうだと思うようになり、資料を見せてほしいと言ってきました。少し時間はかかりましたが、同じ方向向いて対応できるようになりました。
- ・主人にも先生から教わったことを伝え、時々ですが取り入れてくれています。
- ・父親が子どもの主張や意見を聞くようになりました。
- ・あまり育児に積極的に関わらない夫も家族会議をすることで、子どもや家族のことを話す機会が増えました。
- ・不安でしかなかった夏休みもきょうだい二人で過ごし、生活の流れもできている。
- ・きょうだい喧嘩や親子喧嘩が減った。
- ・家庭での雰囲気が良くなった。
- ・家族みんなの笑顔が増えた。
- ・自身の声かけが変わり、みんなご機嫌でスッと行動に移せるようになった。良い具合にまわっている。

4) 支援者への影響

- ・PTで学んだことを支援者に伝えることで、子どもの発達について真剣に考えて実施している家庭と認識されたように感じる。その結果、いろいろな情報をもらえるようになった。
- ・学校でもとても頑張っていて、嫌なことにも少しずつ取り組めるようになったそうで、担任の先生から「何かありましたか？」と子どもの変化に驚いていた。

5) 意見・要望

(1) オンラインによる個別支援方式PTについての意見・要望

- ・私は自宅でテレワーク中の昼休みなどを利用して受講しました。とても良かったです。今後もリモートで時間が調整可能な受講スタイルであれば、共働き、家庭の父母なども受けやすく、とても良いと思います。
- ・コロナ禍が終わったら対面でも受講してみたいです。
- ・気持ちを維持することが自分だけでは難しいと思っています。定期的に情報が得られると、私自身も学ぶことができ、子どもへの対応にも参考になるため、お便り的な情報が届くと参考になります。
- ・受講後も定期的なフィードバックがあるといいなと思いました。
- ・通常グループ受講だと伺いましたが、個人的にはマンツーマンで受講できて、うちの子のタイプの場合で教えていただけたのがありがたかったです。
- ・グループはグループで他の家庭のお話を聞ける良さもあると思いますので、選択できるといいのかなと思います。
- ・先生にメールで問い合わせたところすぐに返信をいただき、情報を得ることができ、受講後もつながりがあることで安心することができました。

(2) 対面でのグループ支援方式PTについての意見・要望

- ・4回でちょうどよかった。
- ・他の家庭の工夫を聞くことで刺激になり、また参考になった。なかなか自分の家庭のことを話したり、人の家庭について聞く機会がない。安心して話せて、週に1回、楽しい時間だった。
- ・みんなの家族のことが聞いて良かった。同年代の子とどうしても比べあせていた。ここまでできたら良いか、と自分の気持ちも変わった。
- ・本やネットでPTについてはわかったつもりでいた。しかし、話を聞いて、みんなのことを聞いて、自分の発表もして、それがあって初めて、全然違うんだと感じた。わかっているけど、字でおこして実践することで、自身の感覚としてすごく違った。続けていきたいが、宿題があるからやれた面もある。

5. 考察

本研究において、オンラインによる個別支援方式および対面でのグループ支援方式で実施している全4回の短縮版PTの効果について検討した結果、以下のことが明らかになった。

まずは、子どもの変化として、癩癩や落ち着きなどの症状の改善、手伝い・頑張り・自信・前向き・素直・思いやりなど行動や態度の変化、明るさ・笑顔など表情の変化、自分の気持ちを言葉で表すコミュニケーションに関する肯定的な変化、などがみられ、これらはPTの効果と考えられた。本研究室において従来の全9～10回で実施していたPTについて、「こどものよい行動を母親がほめることで、こどもはどうすればよいのか具体的に理解でき、できることが増えていく効果があること」（富澤・鈴木・氏家，2014）を報告しており、短縮版PTでも同様の効果が得られることが明らかになった。

つぎに、母親の変化としては、イライラしなくなった、怒ることが少なくなった、気持ちが楽になった、穏やかになった、子どもの気持ちを考えるようになった、これまでの自身の言動への気づきを得た、子どもがかわいいと思えた、などの効果が明らかになった。これらの子どもと母親の変化から、母親が実際に子どもをほめることができると子どもの良い変化が実感でき、そこで初めてこれまでの状況と比較し、自ら気づきや反省ができると推測された。できていない状況での指摘は、知らない母親にとって比較や理解ができないことを支援者は知っておく必要があり、指摘ではなく、良い状況を実感できる支援が重要と考えられた。木村ら（2020）は、PTを通して、養育に対する自信の向上や自責感、不安の軽減という母親のメンタルヘルスの向上につながったと報告しており、本研究の結果と一致した効果と考えられる。

さらに、家族の変化として、きょうだいとの関係改善、父親の理解や協力体制ができたこと、家族の雰囲気良くなり笑顔が増えた効果がみられ、母親のPT利用による効果の大きさが明らかになった。大島ら（2021）は、注意欠如・多動症（ADHD）の子どもを持つ養育者を対象にPTを行い、家族関係の改善効果を報告しており、本研究と同様の結果が得られている。

支援者への影響として、支援者からきちんと対応している母親と認識されることでさらなる支援につながる、学校の先生が気づくほどの子どもの変化がみられた効果があったことが明らかになった。

発達に気になる子どもの保護者支援について、山口（2022）はPTを実施できる人員の確保が課題としてあげている。支援者の人的資源に限られる中、従来のPTと同様の効果が短縮版PTで得られるなら、多くの保護者支援利用につながる可能性が示唆された。

意見・要望として、オンラインによる個別支援方式PTでは、時間が調整しやすい、子どものタイプに合わせた支援が良かった、等のご意見をいただきました。また、定期的な情報発信

やフィードバック、対面での対応、希望に沿える複数の支援方法の提供、などの要望があったので、これからの課題として対応することが重要であると考えます。

また、対面でのグループ支援方式PTでは、他の家庭のことを知ることができた利点があげられ、回数についても4回が良かったと短縮版について好意的なご意見をいただきました。今後も短縮版PTを継続し、対面とオンラインとのハイブリッドグループ方式PTなど提案し、改善していく必要があると考えます。

国内のPTの実践研究を系統的にレビューした山口ら（2021）は、「サンプルサイズの平均は親が11、子どもが10と小さく、実行度、参加率、プログラムの評価に関する報告が不足している」と指摘している。本研究室では、オンラインによる個別支援方式利用者のみでも2年10か月間で計61名に上っており、サンプルサイズの大きい実践研究の可能性があると考えられる。特に、短縮版PTは回数が少ないことで参加率の増加が期待されるため、今後、プログラムの評価を含めさらなる研究の継続が必要と考えられる。

6. 結論

全4回の短縮版PTの効果について検討した結果、効果として、子どもの症状の改善・行動・態度・表情・コミュニケーションに関する肯定的な変化がみられ、母親の変化としては、気持ちよくなる・穏やかになる・子どもの気持ちを考える・これまでの自身の言動への気づきを得る・子どもがかわいいと思えたなどが明らかになった。さらに、きょうだいとの関係改善、父親の理解や協力体制ができたこと、家族の雰囲気良くなり笑顔が増えた効果がみられるなど家族への影響がみられた。また、さらなる支援につながる効果もみられ、短縮版PTでも効果が十分に得られ、支援者の人的資源に限られる中、多くの保護者支援利用につながる可能性が示唆された。

意見・要望として、オンラインによる個別支援方式PTは時間が調整しやすい、子どものタイプに合わせた支援が良かった、等の意見がみられた。要望として、定期的な情報発信やフィードバック、対面での対応、希望に沿える複数の支援方法の提供があり、これからの課題として対応していきたいと考えます。また、対面でのグループ支援方式PTでは、他の家庭のことを知ることができた利点があげられ、全4回の短縮版は好意的であったため、今後も継続し、対面とオンラインとのハイブリッドグループ方式PTなど提案し、改善していく必要があると考えます。さらに、短縮版PTは回数が少ないことで参加率の増加が期待されるため、今後、プログラムの評価を含め調査を継続していきたいと考えます。

引用文献

- 家村明子・山下裕史朗 (2016) 小児科医ができる治療、療育、連携のマネジメント 学童—家族に対する助言ペアレントトレーニング, 小児内科, 48 (5), 717-721.
- 大島智恵・佐藤美理・反頭智子・相原正男 (2021) 注意欠如・多動症の子どもの養育者へのペアレントトレーニング終了半年後の効果, 山梨大学看護学会誌, 20 (1), 17-22.
- 小野和哉 (2022) ADHDの最近の知見—発症メカニズムと治療法— ADHDの心理社会的治療, 医学のあゆみ, 280 (2), 152-155.
- 上林靖子・北 道子・河内美恵・藤井和子 (2009) こうすればうまくいく発達障害のペアレント・トレーニング実践マニュアル, 中央法規出版.
- 木村弘幸・原田一博・片岡貴志・高野真由美・菅谷智一・森 千鶴 (2020) 発達障がい児の親の養育自信度の変化—ペアレントトレーニング前後の比較—, 日本精神科看護学術集会誌, 61 (2), 191-194.
- シンシア・ウィットム 著・中田洋二郎 訳 (2002) 読んで学べるAD/HDのペアレント・トレーニング—むずかしい子にやさしい子育て—, 明石書店.
- 清野聡子 (2017) ペアレントトレーニング・プログラムの手法を看護教育に取り入れる試み, 日本精神科看護学術集会誌, 59 (2), 294-298.
- 富澤弥生・鈴木千明・氏家享子 (2014) 母親が発達障害のあるこどもをほめた内容と効果, 東北福祉大学特別支援教育研究室研究紀要, 6, 23-29.
- 中田洋二郎 (2010) 発達障害のペアレントトレーニング短縮版プログラムの有用性に関する研究, 立正大学心理学研究所紀要, 8, 55-63.
- 西村勇人・橋本桂奈・水野 舞・佐藤充咲 (2022) 自閉スペクトラム症・注意欠如多動症の混合グループに対する短縮版ペアレントトレーニングの有効性に関する研究, 認知行動療法研究, 48 (2), 217-224.
- 山口穂菜美・吉本 茜・原口英之 (2021) 我が国における発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニングの研究動向—系統的レビューによるアップデート—, 行動分析学研究, 36 (1), 67-94.
- 山口穂菜美 (2022) 障害児通所支援におけるペアレントトレーニングの実施状況と課題, 小児の精神と神経, 62 (2), 141-150.
- 横山浩之 (2014) マンガでわかる魔法のほめ方PT: 叱らずに子どもを変える最強メソッド, 小学館.